

札、石造物）碑文等がそれである。

これにより中世佐伯荘約六百年の歴史に大神氏が深く根を下ろしていた史実が分かるものと思う。つまり大神良臣の後裔と考えられるからである。

【参考文献】

日本三代実録

日本古代氏族人名辞典

一宮市史

源平の雄緒方三郎惟栄

尾張塘叢

日本神話伝説総覧

神社辞典

佐伯一族の興亡

大分県地方史七九号



## 日帰り研修に参加して

高 司 良 恵

(会員 佐伯市宇山区)

出 発

・日時・四月十日(土) 研修先・宇佐市

低気圧北上に伴い天候を気にしつつ、弥生町役場に集合、午前八時マイクロバス、自家用車二台に分乗出発した。参加者十二名(敬称略)、汐月、矢野、小野、佐藤、宮下、五十川、吉田、御手洗、深田、小林、高司。

研修部より車中で資料を配布される。深謝。

米良から大分自動車道を走る頃は、天気も回復し薄日がさし、ほっとした気持ちに浸るのも束の間、挟間を過ぎ別府に入ると濃霧の発生で通行止め。止むなく別府に出て国道十号線を、日出く赤松峠く山香経由で宇佐市へ。

大分県立歴史博物館に十時過ぎ到着した。

高速の道を遮る山の霧

館内で休憩、係員の説明を聞き自由に館内を見学することにした。

常設展示「豊の国・おおいの歴史と文化・くらしと祈り」が八つのテーマで構成され紹介されていた。(一)生死いのり (二)豊の古代仏教文化 (三)宇佐八幡の文化 (四)六郷山の文化 (五)富貴寺大堂の世界 (六)広がる仏教化 (七)信仰とくらし

(八)匠たちのわざ

以上であるが、この事については史談第一八〇号・P45「宇佐・中津研修の旅」で米水津村の浜田平士さんが、まとめられていますので略させていただきます、拙い私の感想を記して報告します。



今回の研修メインでもある歴史博物館の見学は、時間もあり自由な立場でゆっくり見学することが出来た。

玄関正面原寸大レプリカ「熊野磨崖仏大日如来像」に先づ圧倒されました。仏教文化の古い歴史の流れの中に、無限の祈りとあの巨大な磨崖の謎の世界に引き込まれてしまった。「富貴寺大堂内陣」復元は華麗な中に莊嚴さがあり、本尊阿弥陀仏の前で思わず合掌し釘付けになった。大堂の壁画は浄土教の主題によって描かれているが、四天柱に見られる密教の要素から当時の世相を伺うことができるし、平安貴族の日常生活の一端にもふれることができた。絵仏師の流麗な筆法・色彩にしばし我を忘れ浄土の世界に身をあずける事ができたが、「よくもまあ、こんなに復元ができたものだ」とおどろきと感歎のため息であった。

最澄と空海が唐からもたらした天台・真言の両密教は山岳仏教を生み出し、山岳寺院の発達となった。国東半島・県北を中心に出土した数々の展示物は、目を見張るものが多かった。

経典を土中に埋納した経塚から出土した経筒は、殆ど完全な形であった。仏法の消滅を恐れ当時、銅製や陶製

の容器で埋納していたのは執念の一念が伺われる。又、経筒の色彩や装飾加工・模様など、心にくいまで手工が凝らされていた。

又、各寺院・寺・岩屋・小堂に祀られている数々のみ仏様に接し、心うたれる思いがした。宇佐市天福寺の菩薩立像・如来立像いずれも木彫仏であるが、お姿はほぼ完全。部分的に御手の痛みはひどかったが、落着きのある色彩、しなやかな彫り口、一彫一彫が生きづいている様に感じられ、おやさしい心安らく立像であった。同じく吉祥天立像二体のうちの童女は、かわいらしく柔和そのものであった。大分市金剛宝戒寺の不動明王座像は、両眼を見開き前歯をあらわに見せた真言宗系の特徴で、足をどっかりと組み、横から髪を垂れた御姿は威厳を感じた。又、同寺の聖徳太子像は我が国仏教の祖である聖徳太子の信仰、各地の寺院の再興を通して全国に広まり、佐伯地方の浄土真宗寺の御内仏でも祀られている。ふつくらとした童顔、合掌された立像、うす錆びたえんじの御袴をまとい、じっと見つめられるおやさしい眼差しに、当時の人々は心安らく祈りを求めた事と思う。

ちよつとひょうきんに、木の葉を身にまとった江戸時

代、香々地町伊壺の木造猿田彦像は杖を持ち、木像の猿田彦としては珍しく注目されているとのこと、庚申講では本尊として崇拝されている。佐伯南郡でも庚申塔や庚申講が現在でも各地区で催されている。

豊後高田市、長安寺の太郎天・二童子像・安岐町、瑠璃光寺の阿弥陀如来像、日出町の蓮華寺の千手観音像、伝国東の如来像・不動明王、大田村永松区の地藏菩薩像、本耶馬溪町羅漢寺の観音菩薩像、日田市永興寺の兜跋毘沙門天立像・四天王像、国東町泉福寺の無著妙融像、挾間町龍祥寺の開山・放牛光林像、豊後高田市円福寺の開山・大応国師像、日田岳林寺の明極楚俊像。

仏教も社会構造(政権とのかかわり)に対応して多様に分化し広がり今日に至った歩みだが、浅学な私にも、なにかしら感じる事ができたように思う。

又、大分県は石造物の宝庫であるといわれる。県内八十六ヶ所、総数四百体の磨崖仏があるといわれ全国一を誇っている。特に平安後期から鎌倉時代になって作られたものが多く、山岳仏教の名残りをとどめている。仏教が庶民層に広がった中世、信仰を反映した磨崖仏・石塔・石碑など、長い年月の風化に堪え、その伝統は現代

に脈々として生き続けている。玄関正面の大日如来像、白杵市の白杵古園石仏、大分市の元町石仏、安心院町の下市磨崖仏、白杵市の中尾五輪塔、三重町の法泉庵宝篋印塔、佐伯市の上岡十三重塔、三重町の的場石幢、蓮城寺宝塔など……。

私も今日まで、あちらこちらの石造物の見学に出かけてみたが、「こんな所に石造物が」とあまりの無関心さに恥じ入る事が多い。佐伯南郡にもまだまだ未解のものが多いのではないかと思われる。石造物に託した当時の庶民の願いと祈りを今、私達は受止めてこの歴史的事実を後世に残し伝える義務があるのではないかと思いつつ、現地研修に積極的に参加したいと念じている。

「信仰とくらし」の中で感じたことは、今、地域おこしとして各市町村で取り組んでいる「季節の祭り」「地域に残る民俗芸能」「八幡社・寺院の祭り」など、年々盛大に催され保存会の活動も活発になり、各地との交流も盛んに行われる中で、そのひとつひとつの行事や祭りで、われわれ庶民の普遍的な素朴な願いがこめられていることを忘れてはならない。祈りの方法や形もその土地で多種多様であるが、それが又 何よりの楽しみの行事

でもあったし、四国八十八ヶ所、西国三十三ヶ所の巡礼など、神仏を祀ることからも人々との交流もできた時代であった。

「信仰とくらし」の見学で一息つき、じっと目をつむると、幼い日の祭りのひとこまひとこまが、走馬燈の様に頭の中を駆け廻り郷愁をさそい、今は亡き祖父母をはじめ、父や母・兄弟・幼な友達との思い出が、次から次と思い出され、心の糧としていつまでも脳裏に印象強く残っている。

最後に「匠たちのわざ」を見学した。伝統的な手仕事で物を作る職人達にスポットを当てて紹介。生活に密着した諸用具、地域の特性を又、実情にあわせたいわゆる地場産業が、とりあげられていた。竹細工・鍛冶屋・小鹿田焼・鍍絵・豊後表・下駄・豊後織・日田の漆器・中津の和傘・郷土の玩具と、およそ人間技とは思えない程のすばらしい製品の数々に、ただ目を見張るばかりであった。その中でも鍍絵の絵柄は庶民の招福除災の願いがこめられ、郷土玩具の一品一品は素朴で温もりがあり、なつかしさがこみ上げてきた。中津の和傘作りも現在では一軒になってしまい惜しい気持ちでいっぱい、弥

生町の和紙作りも市原さんを最後として途絶えてしまったのは、なんだか心の空白を感じて淋しい限りである。二時間余館内をゆつくり自由に見学でき、再び正面玄関の大日如来像を仰いだ。すばらしい大分県の歴史と文化を更めて認識する機会に接し、充実した見学ができたと思う。

調査研究・展示公開・保護保存・教育普及の事業に取り組まれている県関係者・館員の方々にお礼を申し上げ、親しみ易い資料館・生涯学習・体験学習・学校教育・地域社会と今後ますます整備充実を願いながら、椿花咲く庭で昼食をすませた。

### 宇佐海軍航空隊跡

昼食をすませ十二時三十分、小野さんのご配慮により、宇佐市教



育委員会より林さん、図書館の井上さんに同行していただき、見学の先導役となり、見渡す限り広大な宇佐平野の麦畑の中を三台の車は航空隊跡に向かった。車中「田園風景：のどかなあ：」後席の宮下さんの感極まった声に、みんなは思わず大きく頷ぎました。

先ず、柳ヶ浦高校正面の道路斜め西に「忠魂碑」と刻した石碑があった。昭和三十一年十月二十日建立「飛行予備学生出身士官死者氏名」の板碑に、七十四名の名前が彫られていた。最年長二十七才、最年少二十一才という若桜である。折りから降り続く雨に碑は苔むし、判読に困難な文字もあり、つい涙が出てしまった。誰が手向けたのか、墓前の供華に安らぎを覚えた。

とめどなくながる涙押えつつ

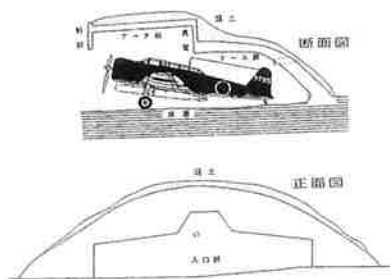
特攻遺書読む知覧の里に

(知覧の里を訪ねたときの歌が思い出された。)

！若い血潮の / 生命惜しまぬ / 大和魂にや敵はない「若鷲の歌」が涙まじりに脳裏をかすめる。

知覧(旧陸軍)・佐伯・宇佐(旧海軍)は特攻基地としてここから多くの若者が飛び立ち、南の空で散華した。

広い宇佐平野(航空隊跡)には、半世紀の年月が流れた



城井1号掩体壕突測図



田代町 城井地区 城井1号掩体壕(突測)



五十金蔵市に保存されているレンガ造りの建物。壁面には無数の掃射跡がある

が、まだ数々の戦争の爪跡が残っている。落下傘整備所と伝えられているレンガ造りの建物の壁面には、無数の機銃掃射跡が残っていた。現在は国有財産のため、どうすることも出来ない現状とのこと。

広い田んぼの中に「爆弾池」と呼ばれるものがある。爆弾投下跡である。佐伯周辺でもよく見られたが、今は殆ど埋め立てられている。宇佐では貯水槽として利用されているとのこと。

次に城井地区掩体壕の見学に行く。掩体壕とは、軍用機を敵の空襲から守るための施設である。現在航空隊跡地は水田や它地となつて、当時の面影を残すのは十基の掩体壕とわずかな遺構だけである。宇佐市は平和のシンボルとして二十一世紀に伝えることにし、城井地区にある掩体壕一基を史跡に指定し、その周辺の用地を買い上げることにし、自治省の地域文化財保存事業として、史跡整備を進めている。佐伯航空隊が空襲を受け使用不能になると、宇佐航空隊に移動交流がなされたと聞き、佐伯と宇佐がとも身近に感じられた。佐伯航空隊にも掩体壕が作られた。多くの人々が勤労奉仕にかり出されたが、あまり効を奏しなかった。空襲で航空隊・防備隊が

失せた佐伯航空隊。  
青々と麦畑が続く宇佐  
平野。ふと空を見上げ  
た。静かな平和の空で  
ある。宮下さんの車中  
でのあの言葉が、いつ  
までも続いてほしいと  
願って止まない。宇佐  
航空隊跡の見学は、戦  
争体験者にとっては一  
入身にしむ見学であっ  
た。

阿川弘之著「雲の墓  
標」・高木晃治著「足摺の海と空」を再読したいと思っ  
た。

見学が終わったのは午後二時過ぎであった。同行の両  
氏の御好意により「豊前善光寺」「光岡城」「四日市横穴  
墓」の遺跡見学も出来た。

一日の研修旅行であったが雨にもあわず、林さん・井  
上さん御二人は休日返上、現地見学で説明をして下さっ



て、移動にも時間の無駄もなく合理的な見学行動日程で  
あった。

- ・大分県立歴史博物館では安らぎを
  - ・宇佐海軍航空隊跡では平和を
  - ・善光寺・光岡城址・横穴墓では夢を
  - ・研修旅行では会員同志の親睦が
- 企画運営の研修部の方、安全運転の佐藤さん・小野さ  
ん、ありがとうございます。

帰りは大分自動車を快適に走り、弥生町役場に予定通  
り五時過ぎに無事全員元気に帰着した。

